

当院のアルコール治療プログラムの参加状況と断酒について

金子祥香 佐藤佑貴 金谷沙奈美 林美里 澤谷朋恵 ニツ川利香

【はじめに】アルコール（以下、AL）依存症の治療は断酒の達成とその継続を目標とし、AL 依存症の専門医療機関を中心に行われてきた。当院で実施している断酒会など様々な治療プログラムと断酒継続の関係を調査し、当院の臨床実践の向上を目指す目的で研究を行った。

【対象及び方法】2021 年 1～12 月の期間に主病名 AL 依存症で当院へ入院し、その後退院した患者 90 名の 2022 年 8 月までの最終受診時の診療録の後方視的調査を行った。調査項目：(1)入院中の以下の治療プログラムおよび断酒を目的としたコミュニティへの参加回数（AL 学習会、AL 認知行動療法（以下 ALCBGT）、ピアサポート、断酒会）、(2)退院後の断酒状況（最終通院時点で診療録に記載された飲酒状況を確認し断酒の有無を判定）。

【結果】90 人中、断酒群は 31 人、再飲酒群は 36 人、断酒状況不明群は 23 人であった。AL 学習会参加回数中央値は断酒群 19：再飲酒群 8、ピアサポート参加回数中央値は断酒群 2：再飲酒群 1。ALCBGT については 1 クール全参加、部分参加、不参加に分けて分析した結果、断酒群は全参加 17 人：部分参加 7 人：不参加 7 人、再飲酒群は全参加 12 人：部分参加 6 人：不参加 18 人であった。断酒会参加の有無は断酒群で参加 25 人：不参加 6 人、再飲酒群では参加 21 人：不参加 15 人であった。

【考察】AL 学習会については断酒群の方が参加回数が多かったが、その理由としてはもともと病識を有しており学習会参加意欲が高い者が多かった、または、長期入院者が頻回に参加していたなどが考えられる。ピアサポートについては、両群間で中央値に明確な差は無かったが、7 回以上の参加者は断酒群のみでみられた。これは入院期間や、ピアサポートの形式と参加者との相性などが影響したものと考えられる。ALCBGT については、断酒群の方が全参加者が多かった。また両群で部分参加者の割合は少なかったことから、1 度でも参加すれば全参加につながる可能性があり、参加を迷う AL 依存症者が参加しやすい環境づくりが重要と考えられる。断酒会については、両群ともに半数以上参加しており断酒会そのものの断酒効果は判断が難しいが、断酒会に参加しやすい環境が反映されていると考える。

ALCBGT は構造化されたプログラムであり測定がしやすく、参加回数に影響するその他の要因（入院期間など）が少なかったことから、効果の測定がしやすかった。一方で、明確には構造化されていないその他のプログラム・自助グループは測定と分析が困難であった。日常診療実践の改善の為に、構造化と実践の測定方法を考案していく必要がある。

また、プログラムによって参加しづらい要因が存在することが考えられたため、より参加しやすいプログラムになるような工夫が必要と考えられる。